

# 先土器時代のユニットについて

西 口 徹

## I

先土器時代の遺跡の発掘調査を通じて、われわれの目の前に具体的な人間の行動（生活）の場としての住居跡の遺構の検出はほとんど見られない。われわれにそのことを想起させるのは、遺跡内から出土する石器、剥片といった類いのものである。そしてこれらの遺物は遺跡の中で集中して発見されることが多い。これらの集中する部分は『ユニット』あるいは『ブロック』と呼ばれている。

『ユニット』は小林達夫他によってその規模とか石器等の有無に応じてA型からF型までに分類（注1）されている。『ユニット』はこの様にある行動をその中に内包している可能性がある。

遺跡の中で『ユニット』の在り方を見ると、石材が種類しかないものもあるが、その大部分は異なった多種の石材が見られるものが多い。そこで、『ユニット』における石材の違いが時間的（注2）な行動の違いによって形成されたものと仮定するならば、以下の分析方法が可能となる。

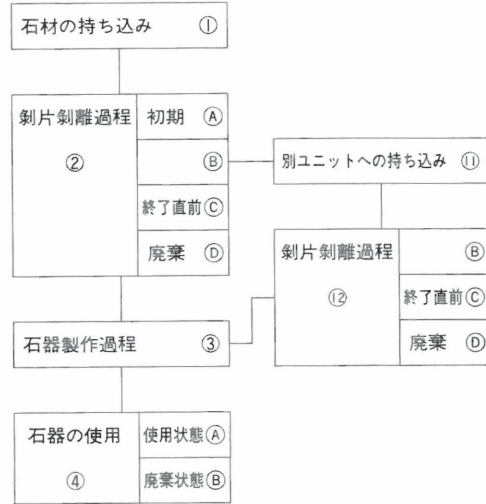
『ユニット』の分析は主に石材別に行なう。ただし石材が同一個体もしくは同一母岩から派生したものと認められるものがよりのぞましい（報告書によっては個体別の色別を行なっておりこれらの条件が整っているものもあるが、その逆にそれらがあまり明記されていないものもある）。

石器は通常以下の製作過程で製作され、使用、廃棄がなされる。石核（石材）の持ち込み①、剥片剥離過程②（これは初期の石核調整段階A、引き続き剥片剥離段階B、そして残核で廃棄される直前の段階C、そして残核廃棄の段階Dに分かれる）、そして石器製作過程③、『ユニット』内での使用④（これは使用状態A、廃棄状態Bに分かれる）という一連の行動が考えられる。ただし②-Bの段階より他の『ユニット』への石核の移動が考えられる場合①もある（図表1）。

これらの行動は『ユニット』の中に最終的な状態で観察することができる。それとともに、それまでの欠落した部分も、遺物の出土状態によって

ある程度判断することも可能ではないかと思われる。以下実際の出土例を通してみたいと思う。

### A) ユニットの生成過程



### B) 各ユニットの具体的な行動形態

遺跡名	ユニットNo.	ユニット型	石材	行動形態
木刃峠	第1ユニット	B型	硅質粘板岩	①, ②(A-C), ③, ④(A-B)
			黒曜石	①, ②(A-C), ③, ④(A-B)
			チャート	②(D)
			メノウ	④(A-B)
	第3ユニット	C型	硅質粘板岩	②(B-D), ③, ④(A-B)
			黒曜石	②(B-C)
	第7ユニット	A型	硅質粘板岩	②(A-C), ③, ④(A-B)
黒曜石			②(B-C), ③, ④(A-B)	
第21ユニット	C型	チャート	④(A-B)	
		黒曜石	②(A-B)	
第24ユニット	E型	硅質粘板岩	④(A-B)	
		黒曜石	②(B-D), ③, ④(A-B)	
第25ユニット		黒曜石	②(A-D), ③, ④(A-B)	
		黒曜石	②(A-D), ③, ④(A-B)	
曇谷津	第14ユニット	B型	硅質粘板岩a	②(A-D), ③, ④(A-B)
			硅質粘板岩b	②(C-D), ②, ③, ④(A-B)
			メノウ	④(A-B)
			粘板岩	④(A-B)
			第15ユニット	B型
		硅質粘板岩b	②(D)	
		メノウ	④(A-B)	
		粘板岩	④(A-B)	

注) ①は石材がもち込まれたと思われるもの。  
②から始まるものも①から始まったと思われるものもあり、本質的に同じと思われる。

図表1 ユニットの生成過程と行動形態

II

1)木苅峠第1ユニット・第3ユニット・第7ユニットの場合(図表2)

出土層位はIV a層である。第1ユニットはB型、第3ユニットはC型、第7ユニットはA型とされている。第1ユニットと第3ユニットは接合関係がある。そして第1ユニットのチャートの残核と第7ユニットのチャートの剥片が同一個体として認められている。これらることによって第1ユニット、第3ユニット、第7ユニットは1つのグループ(注3)とされている。

第1ユニットは遺物総数 240点、石材別にみると硅質粘板岩 150点、黒曜石84点でほとんどしめられ、残りはチャート3点、メノウ1点、頁岩2点となっている。石器はナイフ形石器が3点、内2点は黒曜石で1点はチャートである。他にスクレイパーと刃器状剥片各1点でいずれも硅質粘板岩である。残核は2点で黒曜石とチャート各1点である。

第3ユニットは遺物総数 150点、石材別にみると硅質粘板岩 127点、黒曜石23点である。石器はナイフ形石器1点、ドリル1点である。いずれも硅質粘板岩である。残核は1点で硅質粘板岩である。

第7ユニットは遺物総数 100点、石材別にみると硅質粘板岩67点、黒曜石31点、チャート2点である。石器はナイフ形石器2点、いずれも硅質粘板岩である。スクレイパーは3点で、硅質粘板岩2点と黒曜石1点である。グレイバーは1点でチャートである。残核はこのユニットには存在しない(図表2)。

これら上記のユニットの具体的な作業内容を石材別に分析してゆくと、第1ユニットの硅質粘板岩の遺物の集中する範囲で①~②-(A~C)までの作業を行ない、スクレイパー、刃器状剥片を作る作業③が行なわれた。そして石器使用の④-(A~B)が推測される。

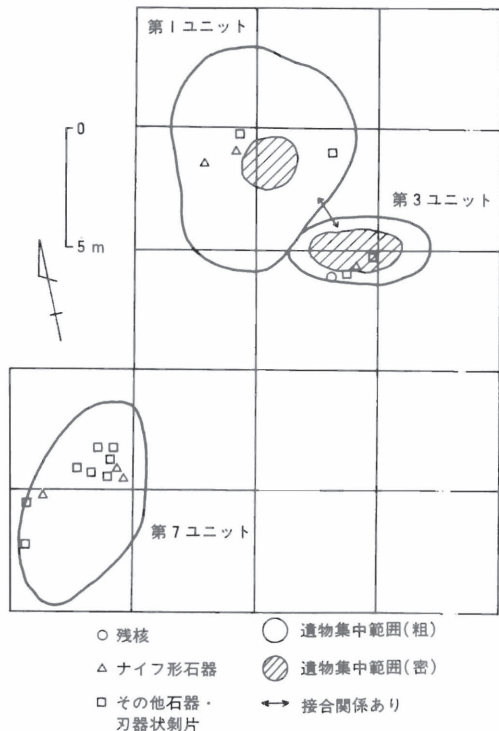
また黒曜石は剥片剥離作業①~②-(A~C)を行ない、ナイフ形石器製作作業③も引き続き行なわれたものと思われる。さらに石器使用④-(A~B)が推定される。

チャートは残核他2点の剥片が存在するが、明確な剥片剥離過程は推定できない。②-(D)。

第3ユニットの硅質粘板岩は第1ユニットの剥

片剥離作業に引き続き、剥片剥離作業②-(B~C)が行なわれ残核として当ユニットへ廃棄②-(D)されたものと推測される。石器もこれらの剥片剥離作業に引き続きナイフ形石器とドリルが製

木 苅 峠	第1ユニット	第3ユニット	第7ユニット	
遺物総数	240点	150点	100点	
石	硅質粘板岩	150点	127点	67点
	黒曜石	84点	23点	31点
材	チャート	3点		2点
	メノウ	1点		
	頁岩	2点		
石	ナイフ形石器	3点(黒曜石2点 メノウ1点)	1点(硅質粘板岩)	2点(硅質粘板岩)
	スクレイパー	1点(硅質粘板岩)		3点(黒曜石1点 硅質粘板岩2点)
器	グレイバー			1点(チャート)
	ドリル		1点(硅質粘板岩)	
類	刃器状剥片	1点(硅質粘板岩)		
残核の有無	2点(黒曜石1点 チャート1点)	1点(硅質粘板岩)		



図表2 木苅峠第1ユニット・第3ユニット・第7ユニット

作③されている。石器の使用④-(A~B)も推測される。

また黒曜石は剥片剥離作業②-(B~C)が行なわれたと思われる。

第7ユニットの硅質粘板岩は若干の剥片剥離作業②-(A~C)に引き続き、ナイフ形石器とスクレイパー各2点の製作③と使用④-(A~B)が推測される。第7ユニットの硅質粘板岩の場合、他のユニットとの先後関係が明確でないため剥片剥離作業は②としておく。

黒曜石はやはり剥片剥離作業②-(B~C)およびスクレイパーの製作③と使用④-(A~B)が推測される。

2)木苅峠第21ユニット・第24ユニット・第25ユニットの場合(図表3)

出土層位はIV a層である。Dのグループよりはやや後出とされている。第21ユニットはC型、第24ユニットはE型、第25ユニットはC型とされている。第24ユニットは第25ユニットと直接接合関係がある。第21ユニットと他の2つのユニットは直接接合関係はないが、近接してしかも石材の大部分は同一個体と思われる黒曜石でしめられているので少なからず関係あると思われる。

第21ユニットは遺物総数 121点、石材別にみると黒曜石が 112点で圧倒的に多く、残りは硅質粘板岩 7点、凝灰岩 2点である。石器は硅質粘板岩製のポイント状石器だけである。残核も存在しない。

第24ユニットは遺物総数 288点、石材別にみると黒曜石が 267点で残りは礫片が15点である。石器はナイフ形石器が 5点(すべて黒曜石)とまとまっている。その他の剥片も比較的まとまったものが多く残核も存在する。

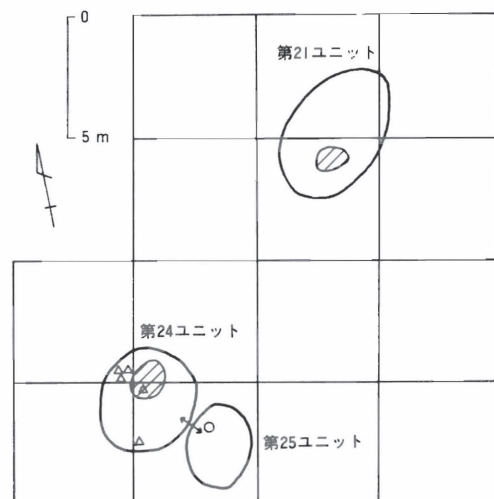
第25ユニットは遺物総数45点、石材は全て黒曜石である。石器はナイフ形石器 1点のみである。残核と礫皮面のある剥片が多くみられる。

これらの上記のユニットの具体的な作業内容を石材別に分析してゆくと、第21ユニットの黒曜石の剥片は比較的小さめのものが多く破片も多く見られることからここでは剥片剥離作業②が行なわれた様である。ただし比較的まとまった形態の剥片や残核らしきものがないことと、礫皮面のある剥片の存在から初期の剥片剥離段階②-(A~B)が考えられる。また硅質粘板岩を石材とするポイ

ント状石器は欠損品であり、同じ石材の遺物も少ないところから石器使用の④-(A~B)が推測される。

第24ユニットはほぼ黒曜石でしめられている。それらの残核も存在するし、しかも剥片も比較的まとまっているものが多いところから剥片剥離作業②-(B~D)が考えられる。しかもナイフ形石器 5点(1点のみ欠損品)が出土しており、ナイ

木 苅 峠	第21ユニット	第24ユニット	第25ユニット
遺 物 総 数	1 2 1 点	2 8 8 点	4 5 点
石 材 別	黒 曜 石	1 1 2 点	2 7 3 点
	硅 質 粘 板 岩	7 点	
	凝 灰 岩	2 点	
	礫		1 5 点
石 器 類	ナ イ フ 形 石 器	5 点(黒曜石)	1 点(黒曜石)
	ポ イ ン ト 状 石 器	1 点(硅質粘板岩)	
残 核 の 有 無		1 点(黒曜石)	1 点(黒曜石)



図表3 木苅峠第21ユニット・第24ユニット・第25ユニット

フ形石器の製作の場③および使用④-(A~B)が推測される。

第25ユニットは残核や礫皮のついた剥片が多くみられる点により剥片剥離段階②-(C~D)が考えられる。ナイフ形石器は第24ユニットとの関連で考えた方がよく、使用④-(A~B)が推測される。第24ユニットと第25ユニットは一連の作業から形成され(同じ石材であるため何度使用された



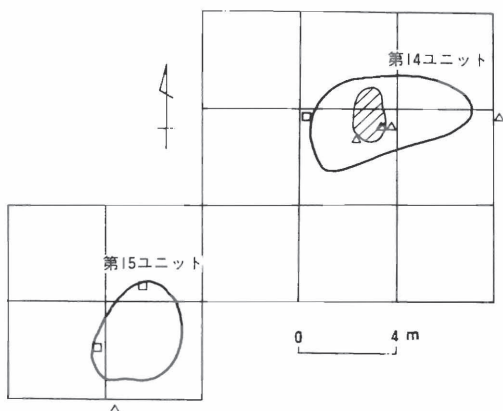
か不明、少なくとも2度以上使われた),しかもナイフ形石器の製作場としての機能をはたしたものと推定される。

3)星谷津第14ユニット・第15ユニットの場合(図表4)

出土層位はⅣ層下部とされている。前述の木苺峠のグループとほぼ同時期のものと思われる。第14ユニットと第15ユニットは直接接合関係はないが、明らかに同一個体と思われる硅質粘板岩(a)(b)を共有している。

第14ユニットは遺物総数75点、石材別にみると

星谷津		第14ユニット	第15ユニット
遺物総数		75点	16点
石材別	硅質粘板岩 a	60点	5点
	硅質粘板岩 b	5点	5点
	メノウ	2点	1点
	粘板岩	2点	4点
	硬砂岩		1点
	礫(片)	6点	
石器類	ナイフ形石器	2点(粘板岩1点 メノウ1点)	
	切出形石器	2点(硅質粘板岩の1点 メノウ1点)	1点(メノウ)
	角錐状石器	1点(硅質粘板岩 b)	1点(粘板岩)
	ハンマーストーン		1点(硬砂岩)
残核の有無		1点(硅質粘板岩 a)	1点(硅質粘板岩 b)



図表4 星谷津第14ユニット・第15ユニット

硅質粘板岩(a)60点,同(b)5点,メノウ2点,粘板岩2点,他礫片6点である。石器はナイフ形石器は2点でメノウと粘板岩各1点ずつである。切出形石器は2点でメノウと硅質粘板岩(a)各1点ずつである。角錐状石器は1点で硅質粘板岩(b)である。残核も硅質粘板岩(a)が1点ある。

第15ユニットは遺物総数16点,石材別にみると硅質粘板岩(a)が5点,同(b)が5点,メノウ1点,粘板岩4点,安山岩1点である。石器は切出形石器が1点でメノウである。角錐状石器は2点でメノウと硅質粘板岩(a)各1点である。他にハンマーストーンと残核が1点ずつである。残核は硅質粘板岩(b)である。そして礫皮のある剥片(硅質粘板岩(b))が数点存在する。

これら上記のユニットの具体的な作業内容を石材別に分析してゆくと,第14ユニットは硅質粘板岩(a)が多くあり残核と剥片,碎片類がほとんどである。石器は切出形石器が1点あり,剥片剥離段階②-(A~D)と石器製作③および石器の使用④が考えられる。木苺峠第24ユニットと同じ様であるがやや規模は小さい(石器量の少なさは他への流出を考えさせられる)。硅質粘板岩(b)の場合は,第15ユニットに残核があり,第14ユニットに角錐状石器が1点あるが,絶対的な遺物の量の少なさから②-(C~D)と④の行動が考えられる。メノウの場合は3点であるがそのうち2点がナイフ形石器と切出形石器でこれらは他のユニットよりもちこまれた可能性が高い。石器の使用④-(A~B)が考えられる。この例は木苺峠第1ユニットと同じ様である。

### III

木苺峠第1・第3・第7ユニット,木苺峠第21・第24・第25ユニット,星谷津第14・第15ユニットの行動形態は図表1(B)の通りであるが,ユニットのA型およびB型とされているものはほぼ①~④までの行動が予想されるが,星谷津第15ユニットでは石器製作過程③が欠落している。A型, B型との違いは石器の種類で決定されるため行動形態そのものには違いはないと思われる。ユニットのC型は剥片剥離過程②が中心であるが,木苺峠第3ユニットの様に③~④(A~B)という製作,使用の場という性格も考えられるものもある。ユニットのE型はナイフ形石器の製作の場

として位置づけられる木苧峠第24ユニットがあるが、これもある程度使用の場として考えられそうである。

遺物の量そのものは『ユニット』の専有期間の長さあまり関係なさそうであるが、その石材の多様さは期間の長さ、もしくは使用回数多さに関係あるのではないと思われる。

(4班・空港事務所)

## 註

1) 『ユニット』は以下の様に分類されている。

A型—石器の種類が豊富で、その文化層に発見される全器種の半数以上を保有し、遺物も多い。これはその行動型が集中的に行なわれたか長期間に亘る継続を示唆する場である。

B型—石器の種類が単純で、発見される全器種の $\frac{1}{2}$ 以下である。これは限られた特定の行動とのみ関連するが、短期間の継続を示唆する場である。

C型—一定的な石器がなく Core とか Flake が卓越するものである。これは石器製作跡であ

り製品が持ち去られた場である。

D型—厨房具の石器が入っているもので、厨房の場である。

E型—石器の種類が単純で Flake, Core などが大量にあるもので、特定器種の石器製作の場である。

F型—石器や Flake などが数点が単独出土のもので、特定の行動に関連するか、特定の行動と係わりをもたない。

2) 例えばこれは1つの石核が剥片剥離作業を行なって終わる間程度の時間を示す。それは季節単位であるかもしれないし、もっと短い時間であるかもしれない。

3) 数個のユニットがある程度密接な関係があると思われるものをグループと呼んでいる。『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』P112

## 参考文献

『佐倉市星谷津遺跡』昭53

『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』昭50

# 奈土貝塚出土の土偶

高橋博文

奈土貝塚は利根川の南約6km、現在大須賀川が流れる低地を東側に望む標高40mの台地上に位置し、南西側と北東側には小支谷が入り込んでいる(図1)。本貝塚は昭和32年3月、早稲田大学高等学院歴史研究部により一部が発掘調査され、翌33年3月に報告書が刊行されている。ここで紹介する土偶は昭和55年8月大栄町在住の宝田氏より届けられた資料で、植木の移植作業中に単独出土したとのことである。その後、現地踏査を行ない土器片を多数採集した。

図2-1で示す土偶は、a:右側面と脚の断面、b:正面と腹部の断面、c:背面であり、上半身と左脚部が欠損している。

現存する部分の計測値を示すと、高さ14cm、巾10cm、厚さ4cm、脚部の直径4cm、腰部の巾6cm、腹部の高さ2cmを測り、内部は空洞ではなくかなりの重量感がある。腰が細味の割には下半身が発

達しており、脚も先へ向って細くなることはない。腹部は前に向かって張りだし妊娠している状態を表わしていると考えられる。一番張り出した部分には直径1cm、深さ0.25cmの小さな凹み(「ヘソ」と

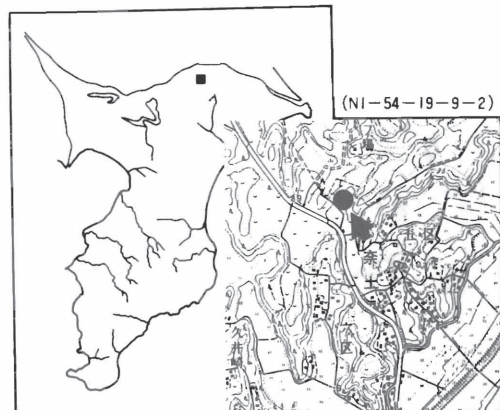


図1 遺跡の立地